

三宅香帆（2024）なぜ働いていると本がよめなくなるのか。集英社新書、

### まえがき 本が読めなかったから、会社をやめました

- ・子どもの頃から本が好きで、好きな本を買うために、就職したようなものだ。しかし社会人1年目、全然本を読んでいないことに気づいた。
  - ・本を読む時間があった。電車に乗っている時間や夜寝る前の自由時間、SNS や Youtube をぼーっと眺めていた。
  - ・筆者にとって本を読めない社会は、「家族とゆっくり過ごす時間の無い社会」「好きなバンドの新曲を追いかける気力もない社会」であり、「学生時代から続けていた趣味を諦めざるを得ない社会」である。筆者にとって読書が人生にとって不可欠な「文化」である。
  - ・多くの人が労働と文化の両立に困難を抱えている。AI における人間らしい働き方、それは労働と文化を両立させる働き方ではないか。
  - ・現代の労働は、労働以外の時間を犠牲にすることで成立している。
- ◎なぜ私たちはこんな悩みを抱えているのかという問いに悩み、最終的にはどうすれば労働と読書が両立する社会をつくることができるのかという難題に挑む。

### 序章 労働と読書は両立しない？

- ・「花束みたいな恋をした」の麦（就職した主人公）の読書に対する姿勢に、「身につまされた」と多くが言う。働き始めると本が読めなくなるのは、映画の世界にとどまらない。
  - ・映画でも現実でも、人々は「労働」と「読書」の間で悩んでいる。アマゾンの読書法ランキングをみると、様々な読書法や学習法の書籍が並んでいる。読書を娯楽として楽しむより、情報処理スキルを上げることが求められている。娯楽としての読書の変化は、労働のあり方が変化していることに明らかな影響を受けている。
  - ・麦と絹の対比は労働環境が異なる特徴以外に、階級格差が気になる。麦は地方の職人の息子、絹は都内出身で大手企業勤め。読書をしようと思う意思の有無に、社会の階級が影響を及ぼしている。
- ◎現代は法律や制度が整備され、100年前に比べて労働環境は改善されているはずだ。しかし文化的趣味を享受する時間が取れないという嘆きは100年前より現代の方がむしろ強まっているように感じる。この矛盾が生まれる背景には何があるのだろうか。
- ◎残業国民でありながら読書国民である日本人。困難に見える労働と読書の両立関係は、なぜ生まれたのだろうか。

### 第一章 労働を煽る自己啓発書の誕生——明治時代

- ・明治時代初期に読書に起きた革命と言えば「黙読」が誕生したことだ。江戸時代、読書といえば朗読（！）だったのだ。森鴎外が「舞姫」を書き上げたとき、家族の前で朗読したエピソードが残っている。「黙読」によって、日本人は「自分の読みたい物を読む」という趣味を得た。
- ・黙読は日本語の表記も変えた。普及したのは句読点である。句読点が急速に増加したのは、明治10年代後半から20年代こと。
- ・明治時代、図書館の登場は日本人の読書習慣に大きな影響を与えた。明治時代に図書館で大量の本を借りて読むような趣味は、エリート学生を始めとするインテリ層の男性のものだった。

インテリ男性にとってすら、自分の読みたい本を選んで読むのは極めて新鮮で目新しい行為だった。夏目漱石はその様子を「三四郎」において端的に描き出している。

- ・明治時代のミリオンセラーは「西国立志編」だ。学問のすすめは、県庁・区町で一定数が割り当てられ公的流布されているヒット作だから、純粹ではない。
- ・西国立志編 (Self-Help) は300人以上の欧米人の成功談がひたすらあげられている。成功者の伝記を教訓と共に収録している。ほとんどが「身分や才能ではなく、自分で努力を重ねたからこそ成功した」という教訓で占められている。偉人のセレクトに、貴族は入れずに、普通の市民から成り上がった人のみ伝記集にした。労働者階級の立身出世物語、それがこの時代の世界的ベストセラーの内容だった。
- ・西国立志編は「修養」という言葉を日本ではじめて使った書籍である。「勤勉」や「努力」という単語を、訳者は「修養」と訳した。この本によって「環境によらず自分で修養しよう」という思想が明治時代には広まっていった。
- ・同書に登場するのはすべて男性である。家庭を顧みずただただ立身出世のために努力を重ねる姿が描かれる。
- ・同書の「修養」思想はどこか現代の自己啓発ジャンルに通じるところがある。「男性たちの仕事における立身出世のための読書」の源流はまさにここにあった。
- ・明治時代後半、「修養」を説く書籍や雑誌がブームになる。「実業之日本」「成功」だ。両書の読者はノンエリートの労働階級の男性が中心だった。「成功」の由来はアメリカで流行していた「success」によるものだった。明治時代の「修養」は、欧米の自己啓発思想を輸入していた。欧米の自己啓発思想の輸入は、日本のベストセラーを作り続けていた。
- ・明治時代後半、日本でも産業革命が起きて、重工業が飛躍的に発展する。それまで農業に従事していた男性たちに重工業を担う働き手となってもらう必要があった。このころの鉄鋼労働者は1日13-16時間も働いていた。「成功」や「実業之日本」は、工場の図書室に置かれた。工場の労働者がこれらを読んでいて、すなわち明治時代の読書は、インテリ層の男性による文芸書の読書だけでなく、労働者階級に読まれる書籍も存在していたのだ。
- ・インテリ層の自己啓発雑誌へのまなざしは、夏目漱石の「門」に描かれている。エリート男性は、「そんなものがあることすらしなかった」と冷ややかな目で見ると、これはまさに現代でもしばしば見られる現象ではないか。

◎明治時代、「成功」というビジネス雑誌が、一方では大阪の工場の図書室で読まれ（それしか読む雑誌がなかった人間）、一方では東京の歯医者者の待合室で読まれる（そんな雑誌があることさえ知らなかった人間）。同じ男性の間でも、日本の階級格差が確かに存在していた証ではないか。

## 第二章 「教養」が隔てたサラリーマン階級と労働者階級——大正時代

- ・昨今の「教養」と銘打った書籍には「ビジネスに役立つ」といった言葉が付されていることが多い。一方で、このような「効率重視」の教養のあり方は、はたして今に始まったことなのだろうか。働きながら読書する人々が、効率を求めていない時代があったのだろうか。
- ・大正時代、日本の読書人口は爆発的に増大した。理由は、国力向上のため全国で図書館が増設された。小学校を卒業した人々の識字率を下げないために採用された手段が読書だった。再販制が導入されはじめた。委託制度が広まり、売れる見込みのある本を大量に仕入れることができるようになった。
- ・時間もあり読書への意欲もある「大学生」という身分の青年が増えた。「三太郎日記」「ころ」が旧制高校の学生達を中心に必読書として売れた。

- ・しかし、当時のベストセラーは、内省的というより、ものすごく暗い。「出家とその弟子」「地上」「死線を越えて」が三大ベストセラー書。(大正ロマンでなく)当時の日本は、大きな行き詰まり感と社会不安に覆われていた。
  - ・大正時代は、痴人の愛の河合讓治のような「サラリーマン」が誕生した時代だ。生まれた土地や階級から解放された青年達が、都会の企業で働くことを選択し始める時代。労働階級でも富裕層でもない、新中間層が誕生した。家柄重視の「士族階級」ではなく、教育を受けたエリートを企業が必要としたのである。
  - ・しかし、日露戦争後の物価高や不景気のせいで、若者達は、せっかく学歴をつけたにもかかわらず、下級職員にならざるをえなかった。想像していたエリート層にはなれなかった。長時間労働や解雇の危機、物価高に襲われた。労働階級とは違う自分を誇示するために、食費を削ってまで服飾費のお金をかける＝物価高に苦しめられる。サラリーマン＝物価高騰や失業に苦しむ人々という図式が社会に定着する。「労働が辛いサラリーマン像」ができあがった。
  - ・(第1章で触れた)エリート間に広まった「修養」は、大正時代には労働者階級の間に既に根付いていた。大正時代の都市部工業労働者による労働団体・友愛会は、「修養」のための団体として結成された。修養を用いて、『労働者は自己鍛錬を怠らないことで団結し、社会の一員として認められるようになる』を掲げていた。
  - ・地方改良運動「財政が破綻している農村をなんとかせよ」により、農村では青年団が組織された。ここでも「自分たちで自己鍛錬し、農村を支えよう」というスローガンとして、修養の概念が用いられる。
  - ・大正時代になると、「修養」ははっきりと労働者の統制を取るため、そして労働者自身が自分の価値を上げるための、自己啓発の思想になっていった。これは今でいう「社会教育」の元祖といえるかもしれない。教養をつけるためといったものではなく、「修養」つまり自己鍛錬の手段として品格をあげる行為や習慣として捉えられていたにすぎなかった。
  - ・「修養」が労働者階級の教育概念となった一方で、エリート階級の間では「教養」が広まった。行為を重視する修養と、知識を重視する教養は違う物になった。修養と教養の差は開いた。「教養」＝エリートが身につける物、「修養」＝ノンエリートが実践するものといった図式が大正時代に生まれていった。
  - ・教養思想の流行の担い手の雑誌は「中央公論」を代表とする「総合雑誌」であった。新聞・講談雑誌を読む労働者との差異化に迫られ、「文藝春秋」「中央公論」などの総合雑誌を読む読者として新中間層ことサラリーマン層は教養文化の担い手となった。
- ◎明治の「修養」主義は、大正時代ふたつの思想に分岐していった。エリート中心の教養主義と、社員教育に継承される労働者中心の修養主義へ。「ビジネスに使える、効率重視の教養」の正体は、令和のビジネスパーソンの不安や焦りを反映した現代のトレンドに思えるが、実際のところ、大正時代に分岐した「教養」と「修養」が再合流したものが、その正体なのではないか。
- ★(P80-81)労働階級と新中間層階級の格差があっはじめて「教養」は「労働」と距離を取ることができる。「教養」は、つねに「修養」＝仕事のための自己啓発との距離を変え続けている。「痴人の愛」のサラリーマン・讓治も仕事をやめてから小説を読み始めたように、仕事に関係のない教養を身につける余裕のあるサラリーマンは、意外とどの時代であっても、少ないのかもしれない。

### 第三章 戦前サラリーマンはなぜ「円本」を買ったのか?——昭和戦前・戦中

- ・1923(大正12)年、関東大震災が日本をおそった。書籍も紙も燃えた。本の値段が高騰

し、不況によって雑誌の売れ行きも落ち込んだ。大正末期、出版界はどん底だった。そんな中、革命を起こしたのが「円本」だった。

- ・円本の言葉の由来は、1冊1円という価格による。当時の日本の作家達の「これを読んどきゃ間違いない」という作品集。全巻一括予約制。ためらいがちだが、1冊1円という破格の金額設定。安い。
  - ・戦前のサラリーマン達は、円本を購入していた。サラリーマンが本を買う文化も、円本全集を契機にはじまった。円本ブーム成功の理由、その1は、書齋文化のインテリアとして。円本は瀟洒な新式の装丁。昭和初期の中流階級の間で増えていた和洋折衷住宅において、洋式の「書齋」の部屋が誕生し、「書齋」は「応接間」の役割も兼ね備えていた。家に客人が来た時に、書齋の本を見せるような設計になっていた。その本棚にぴったりだったのが円本全集。読まなくても読書している格好をするための最適な手段だった。また、読書することで自分の階級を「労働者階級とは違うんだ」と誇示したい新中間層＝当時のサラリーマン、が、円本のターゲットだった。
  - ・円本ブーム成功の理由、その2は、サラリーマンの月給に適した「月額払い」。円本は月々に料金を支払うシステム（現在のサブスクと同じ）。単発でそれぞれ料金を払う単行本より、給料日と共に「毎月いくら」という形で支払うほうが財布のひもがゆるむ。
  - ・円本ブーム成功の理由、その3は、新聞広告戦略、大当たり。
  - ・本を一つ一つ選んでいる暇なんかない。そんなに高い本も買えない。だが教養によさげな本は手に入れたい。そんな層に対して、出版社が「これだけ読んでおけばOK」な本を売る。そして読書人口を増やすに至った。
  - ・都市部のサラリーマンたちが購入した円本は、価格が大幅に下がった古本という姿で、貧しい労働者や農民層へ当たることになった。農村部に出回った円本は長く広く読まれた。
  - ・「読書」を教養が必要な、エリート階層にしか許されない趣味であるという風潮から解放したが、円本ブームの後に売れ始めた大衆向けの小説だった。大正末期から昭和初期にかけて「キング」「平凡」といった大衆向け雑誌が刊行された。「中央公論」などの教養手記の総合雑誌とは異なる大衆雑誌。大衆雑誌で、小説が多数連載されていた。その小説が「大衆小説」「エンタメ小説」と呼ばれ「純文学」とは一線を画するジャンルに成長した。
  - ・新聞や雑誌に連載され人気が出た小説が単行本になりベストセラー化する流れができた。
  - ・一般家庭の標準な一日によると、新聞雑誌を読む時間＝休憩の時間と、読書などをする時間＝勉強・教養・趣味の時間とを分けている。休憩時間に読まれる新聞雑誌にも小説が存在している、この小説こそが大衆小説である。現在に置き換えると、スマホを眺めているときに、SNSで動画やマンガが流れてきて、つい読んでしまうようなものだろう。
- ◎戦前のサラリーマンがいつ本を読んでいたのかへの回答は、電車の中や休日に読書していたという答えも正しいが、それ以外にも「新聞や雑誌で小説を偶然見かけてそのまま読んでいた」ということもある。
- ・その後、戦時中になると本を読むどころの話でなくなる。しかし昭和10年代(日中戦争初期)、パールバックの「大地」、マーガレットミッチェルの「風と共に去りぬ」、エーブキュリーの『キュリー夫人』などの翻訳ベストセラーが出ている。

#### 第四章 「ビジネスマン」に読まれたベストセラー——1950～60年代

- ・戦後、ブームをおこしたものの一つがギャンブルだ。競馬競輪パチンコがブームとなった。パチンコもあり、映画もあり、お酒も楽しめる時代に、労働している人々が、はたして本を読む

時間はあったのだろうか。

- ・サラリーマン層と労働者階級とでは、書籍の普及率が異なっていた。書籍はサラリーマンのもの、雑誌はサラリーマンも労働者階級も変わらず読んでいた。
  - ・教養はエリートのためのものだった。だが戦後じわりじわりと労働者階級にも「教養」は広がっていく。それは労働者階級がエリートに近づこうとする階級上昇運動だ。階級上昇を目指す手段が「教養」だ。そんな彼らが読むのが当時流行していた「人生雑誌」だ。「葦」「人生手帖」では、学歴や就職を度外視した「教養」について語る特集が多かった。読者の投稿を掲載していた。農村の悩みが掲載されていて、鬱屈を共有できる場として雑誌があった（今はSNS）
  - ・1951年に書店は円本を再び狙った。新しい家のインテリアとして、全集は大量に購入された。「文庫」の普及もこの時期だ。少ない紙で本を発行するアイデアが、すでに売れている本の文庫化だった。
  - ・戦後のサラリーマンの新しい娯楽は、パチンコ、株、源氏鶏太のサラリーマン小説だ。それ以前のサラリーマンの読書は「教養」一辺倒。それは岩波書店の翻訳書とか教訓のある小説、戦争や貧困についてのルポルタージュ。
  - ・源氏鶏太の書く小説は、基本的にサラリーマンおよびサラリーマンの家族を主人公に据える。読みやすく、キャラクターも分かりやすい、サラリーマンのための小説なのだ。源氏鶏太は、松本清張、井上靖と並んでベストセラー三人男と呼ばれた。サラリーマン向けエンタメ小説が流行するに至ったのも「教養のためよりも娯楽のために、サラリーマンが気軽に読める本」という需要がたかまっていたからだろう。
  - ・ショウペンハウエル「読書について」、加藤周一「読書術」の発行は、読書そのもののメリットってどこにあるんだという疑問を強く抱いていた証だ。読書の効用や方法について何の疑いも挟まなければ「読書術」なんて必要ないはずだ。読書が他の娯楽に圧迫されているからこそその発刊。
  - ・1960年代、昼休みのスポーツ、社内旅行、運動会、休日のハイキングが盛んで、数少ない休日にも職場のレクリエーションがあった。当時は余暇も職場の人と過ごしていた、サラリーマンの心をつかむには職場の人間関係どうするか、を書くのが一番だ。
  - ・インテリ向けの岩波新書に対抗して、インテリとは違う新たな読者層を掘り起こすとして、カッパ・ブックスが刊行された。タイトルも現代のビジネス書や自己啓発書のタイトルの源流のようなものが多い。「書籍」はインテリ階級に限られるものでなく、仕事に追われる労働者にも、小説を読む余裕のないサラリーマンにも本は身近で役にたつものになった。明日のビジネスに役立つ知識を教えてくれる存在となった。
- ◎（雑にまとめると）高度経済成長期の長時間労働は、日本の読書文化を、大衆に解放した。働いている人向けの本を出すのが一番売れるはずだ、余暇の少ないサラリーマンに売るために、サラリーマンに特化した本、つまりハウツー本やサラリーマン小説を誕生させた。読書が大衆化し、階層に関係なく、読書するようになる時代の到来である。

## 第五章 司馬遼太郎の文庫本を読むサラリーマン——1970年代

- ・司馬遼太郎「坂の上の雲」、この本の主軸は意気揚々と坂を登っていくことができた時代のロマンチズム。一平民の子でも刻苦勉強すれば立身することができる。立身出世主義ということがこの時代の全ての青年を動かしている—
- ・明治時代と言えば「西国立志編」が流行し立身出生が叫ばれたはじめての時代だった（第1章）。「坂の上の雲」はまさに明治時代が舞台となっている。

- ・司馬遼太郎は当時のサラリーマンに愛された作家だった。司馬作品に挿入される「教養」が読み込まれた結果として、ビジネスマンに広く受容された。手軽な教養主義（歴史という教養を学ぶことで、ビジネスマンとしても人間としても優れた存在にのし上がることができるという感覚の帰結）
- ・1970年代はテレビが普及し娯楽と言えばテレビ。テレビドラマが大ヒットし、松本清張や五木寛之の作品もドラマ化され、「テレセラー（テレビによって売れる本）」という呼称ができた。三浦綾子の「氷点」。大河ドラマによる歴史小説売れ、「龍馬がゆく」「天と地と」など。しかし作者はこの傾向に腹が立たらしく海音寺潮五郎は引退宣言を発表した。TikTok で小説を紹介する文化が台頭したときも同様のことがあった。
- ・70年代のサラリーマンの「休息」の象徴が小説ではなくテレビとなった。現代の私たちの「休息」の象徴が小説やテレビではなくスマホとなったのと同様に。
- ・テレビによって小説はむしろ歴史小説やエンタメ小説と行ったジャンルのベストセラーを生み出すことに成功した。いつだって私たちは書店に行かないと本が選べないわけではない。書店の外側で---あるときはテレビ、あるときはスマホ一本への入り口を得ている。
- ・1970年代は文庫創刊ラッシュの時代。廉価で携帯にも便利な文庫は今に至るまで書籍購入のハードルを下げている。通勤電車の中で文庫本を読むという風景はこのころ強く根付いた。1970年代の通勤1時間以下が70%だったが、1980年代には46%に。半分以上が1時間以上をかけて通勤していた。果たしてサラリーマンは通勤電車の中で、「龍馬がゆく」「坂の上の雲」という長い小説を読めたのだろうか。
- ・1970年代に入り、企業内教育において「自己啓発」という言葉が使用され始めた。昇進評価の基準、①成績、②情意、③能力だけでなく、「自己評価」という概念を導入することで評価の公表性を担保した。「自己評価」は写真が勤務時間外に自発的に行うこと。自分で自分を努力させるような能力が評価される。このような企業文化の最中に、サラリーマンは司馬遼太郎を読んでいた。
- ・1970年代は、すでに高度経済成長期が遠いものになってしまっていた。「坂の上の雲」という立身出世の物語は、高度経済成長期へのノスタルジーそのものではなかっただろうか。一方、「ノストラダムス」「日本沈没」「恍惚の人」など社会不安が増大した時代。情意考課（人柄や態度によって査定が決まる）日本社会に合致したヒーロー像が、「龍馬がゆく」の龍馬だ。
- ・小説以外のジャンルでは「甘えの構造」「梅棹忠夫の著作」など日本人論が好評を博す。欧米と肩を並べる日本、歴史や文化の伝統を持ち出しながら日本人的振る舞いを肯定したくなる。しかし不安もある、坂道を登る時代はもう来ないのではないか。
- ・「坂の上の雲」「龍馬がゆく」もあんなに長い小説なのに、通勤電車で読んでいられたのは、失われた高度経済成長期の物語だからだ、すなわちノスタルジーこそが最も疲れた人間を癒やすことを、彼らは知っていた。

(P. 239 にまとめがあるが、見ないこととして)